



コロナ禍で生まれたまちづくりを考える 地域円卓会議

コロナ禍で芽生えた市民活動を新しいまちづくりのスタイルにするには
実施報告書

日 時： 2020 年 11 月 21 日（土） 15:00-17:40
場 所： なは市民活動支援センター会議室 1（沖縄県那覇市銘苅 2 丁目 3-1）
主 催： なは市民活動支援センター
協 力： 公益財団法人みらいファンド沖縄、NPO 法人まちなか研究所わくわく

報告書作成
NPO 法人まちなか研究所わくわく
公益財団法人みらいファンド沖縄

ACTIVITY REPORT

【報告】コロナ禍で生まれたまちづくりを考える地域円卓会議



- 日 時：2020年11月21日（土）15:00-17:40
- 場 所：なは市民活動支援センター 会議室1
- 着席者数：8名（論点提供者、司会、記録者含む）
- 来場者数：20名（NPO・市民団体、福祉・医療機関等）

- 主 催：なは市民活動支援センター
- 協 力：公益財団法人みらいファンド沖縄
NPO 法人まちなか研究所わくわく
- お問合せ：NPO 法人まちなか研究所わくわく

論点提供

渡嘉敷 洋美 氏

（那覇市 市民文化部 まちづくり協働推進課）

コロナ禍で芽生えた市民活動を新しいまちづくりのスタイルにするには

コロナ禍によって顕在化した課題に対して行動された市民の皆さんの活動を、一過性のものにせず、新しいまちづくりのスタイルにするために必要なことを話します。

センターメンバー



渡嘉敷 洋美
那覇市市民文化部
まちづくり
協働推進課



西平 博人
松島自治会
会長



山崎 新
国場児童館
館長



知念 忠彦
なは市民協議会



飯塚 悟
STEM おきなわ
代表



宮城 能彦
沖縄大学人文学部
こども文化学科
教授

➤ 円卓会議に参加いただいた皆さまから

事実の提供

- 市民活動団体や自治会へのアンケート調査から、新しい市民活動のスタイルを定着させるために、行政が、今後特に力を入れて行わなければいけないと思うこと
 - 1.オンライン活用の支援
 - 2.社会的弱者へのアウトリーチ支援
 - 3.協働の仕組み・場をつくる
- 松島自治会では敬老会ができなくなったが、60 軒程度を一軒一軒周り、今まで敬老会に来られなかった方とも直接お話をすることができた。今後、困った時には連絡してもらえらる仲になれる可能性を感じ、とても良い繋がりになったと思う
- LINE を使用している自治会長さんが多く、真和志自治会長連絡協議会で LINE グループをコロナ前につくっていたところ、コロナ禍でもマスクの情報など、スピードを持って必要な情報共有のやり取りできた
- With コロナ時代の新しいまちづくりを考える地域円卓会議（日時：2020 年 10 月 13 日・27 日、主催：なは市民協議会）まとめ
 - ✓ 高校生がフードドライブを始めるなど、まちづくりの機運、チャレンジは生まれており、市民力はまだある。しかし、課題をしっかりと知ることが、市民に求められている
 - ✓ 人づくり、まちづくりをしていくために、集まりにくい状況の中でも、日常の関係性を再構築していくためのアイデアを考えていく必要がある
 - ✓ IT インフラをどのように普及させるのか、市民レベルでできることが沢山ある
- まち協や議員、民間、行政等、様々な方がいる「なは市民協議会」では、課題を見つけると皆で議論している。また、皆で情報発信して共有することで、自ら動く人がいたり、協働に繋がったりしている
- 那覇市内には 11 の児童館があり、コロナ禍では各館、どうしても家庭に居場所が無い子だけ受入れるように運営をしていた。しかし、学校が子どもに外出しないよう指導していたため、子どもが外に出てこなかった
- 国場児童館では、那覇市の保護課からの連絡を受け、保護対象の 5 世帯や孤立しそうな家庭の子ども達に対して、居酒屋さんから提供いただいたお弁当を渡していた
- 国場児童館に登録している 280 人の小中高生の内、ヤングケアラー（弟妹の面倒を全部 1 人で見ている中学生）も含めると、困難を抱えていると感じる子どもは約 50 名程度いる
- コロナ禍の前から学校教育の現場では、人員の数は変わらないのに英語科等の教科が増えるなど、業務を足すことしかしていなかった。そこにコロナ対策も重なり、教員は疲弊している
- 活発に活動されている他地域の先生方の組織は、先生がしたいことを支援する現場裁量権があり、組織の文化が決定的に違う
- 戦後、那覇市は急激に都市化して、離島ややんばるから移住してきた沢山の人達が、元の村の集まりである郷友会をつくって自治会的な機能を果たしていた。一方で、那覇でも元の共同体があり、自分たちの生活を守るために、排他的な自治会になっていた。そのため、那覇の自治会は戦後から加入率が低い

評価の提供

- コロナ禍で学校が休校になったため、発達のでこぼこを抱える子ども等、困難を抱えている子どもの問題が、全て家庭の中に入ってしまったことが問題だったかと思う
- ICT や英語など、教科のテーマが多様多様になり、先生の経験や訓練で得た知識だけでは、まかないきれなくなっている。外部のしっかりした知見を持っている方から、子ども達に学習や影響を与えていくことが重要であり、協働が今後の教育にも必要である

視点の提供

- 地域課題に企業が関わるためには、横串、旗振り役を行政が行うのが良い。ここに課題があります、お願いだから集まると言う、企業も集まりやすい
- 子どもは、夫婦を結びつける意味で「子がかすがいい」と言っていた。今は、地域の人を結びつける意味でも「かすがいい」である。子どもが来るよと言えば、オジー、オパー達も来る。那覇市は子どもが沢山いることをもっと活かすべき
- 家庭状況の課題を見つけるためには、自分から出向いて行かないと分からない。お節介りしても怒られないような関係性をつくるために、コミュニケーションの頻度を上げる必要がある
- 今まで自治会が積み上げてきた歴史や良い部分は必ず必要で、そこに IT 等を少し上乘せすることで、会員とのコミュニケーションの幅がより広がると思う。また、掲示板など、自治会が持っている価値をもう一度見直してみる必要はあると思う
- 子どもの課題を見つけるために、授業参観に参加したり、子どもに会える場所に行くことや、地域の会議に参加したりして、地域に繋がりをつくるようにしている
- 自治会活動を伝える「発信力」と、地域に課題があった時に、自治会に相談にしようと思ってもらえる「受信力」をつけることで問題が可視化され、取り組めることになる
- コロナや高齢化、共同体の絆が弱くなったという危機を、逆にチャンスに変えられる時期じゃないかと思う

➤ 今後のアプローチの方向性（提案）

1) 新しいコミュニケーション手法の検証と開発

コロナ禍で失ってしまった本来必要不可欠な地域内コミュニケーションを検証し、オンラインツール等新技術も取り入れながら、日常の関係性を構築でき地域課題のトピックを見つけやすいコミュニケーション方法を開発すべき。

2) 課題の共有と切り分け、役割分担

新たなコミュニケーションで発掘された地域課題を、行政が受け止め市民に発信共有していくべき。その際には喫緊なものはスピード感を持って少数で取り組む課題と、協働をしながら大きなインパクトを狙う課題をしっかりと切り分けていくべき。

3) 協働のコーディネート

那覇市内には協働大使を始めとした、課題解決に貢献できる市民活動団体が豊富。さらにコロナ禍において新しく登場した団体も登場している。今後協働を中心に行う課題解決は、行政のみで引き受けるのではなく、各リソースをコーディネートして企業や市民活動団体など、様々な関係団体が協働していけるプラットフォームづくりが必要。

■参加者によるサブセッション

コロナ禍で芽生えた市民活動を新しいまちづくりのスタイルにするには

(参加者記載の原文をそのまま記載している為、事実と異なることがあります。グループ毎に①、②・・・と記載)

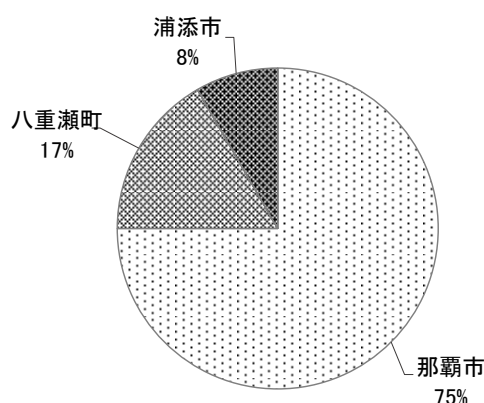
- ①
 - ・アウトリーチ
 - ・コロナによる自粛⇒外に出ないから見えない
 - ・高齢、透析治療等
 - ・“どうしても STAY HOME” せざるを得ない…
 - ・インフォーマルな主体による訪問は有効!!
- ② 子ども食堂 対象とする子どもへのアプローチ
 - ・学校の先生との連携
 - ・仕組みづくり
 - ・協働アクションプラン
- ③ 必要な人のところに必要なサービスが届いていないのでは??
⇒民生委員を通す?→高齢が多いので不安(コロナ)
 - ・若い人が必要。会議などを ZOOM で開催したい。
 - ・ZOOM の研修呼びかけ→参加希望なし LINE が限界
 - ・訪問もしていない
- ④
 - ・産官学→団結力
 - ・真和志地区 地域活性
 - ・自治会のメリット
- ・企業として動くには⇔個人として動くには (フィードバック)
- ・宜野湾。大学・企業。市民協働大学
- ⑤
 - ・地域教育力 IT 教えされる親がいる
 - ・金城さとしさん おやじの会
 - ・仲根さん 脊髄損傷の当事者 90 人 団体
 - ・金城タカローさん SDGs わらびの会 ボランティア がじゅまるハウス 学校
 - ・聴覚障がい 障がい者のキャンプ DEAF シーサー
 - ・情報保障がない。仕組みがない
 - ・IT 教育 NPO→教育と ICT
 - ・脊髄損傷の会 90 人 ZOOM で 40 人→90 人
 - ・今だからこそ集まらないと何かあったとき 地域とのつながり
- ⑥ 情報を得るためのネットワーク仕組みがあるといい
 - ・八重瀬はタテ割りで動けなかった。
 - ・弁当の行先を探せなかった。
 - ・Line、スマホで変わる。
 - ・使いやすいインターフェイス
 - ・スマホ普及、格差も顕在化

コロナ禍で生まれたまちづくりを考える地域円卓会議 参加者アンケート集計

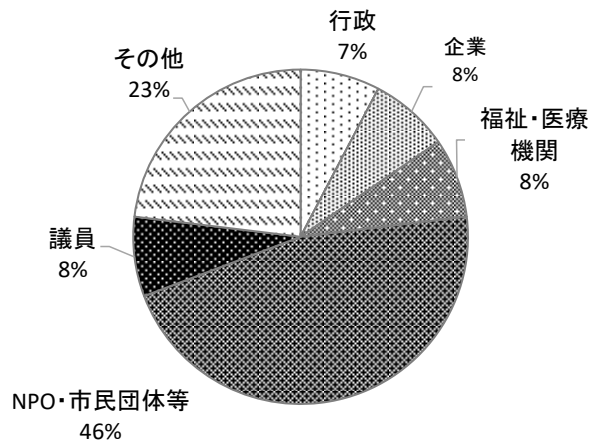
◆概要

- ・日時：2020年11月21日（土）15:00-17:40
- ・場所：なは市民活動支援センター 会議室1
- ・着席者：8名（論点提供者、司会、記録者含む）
- ・参加者：20名（アンケート回収13名、回収率65%）

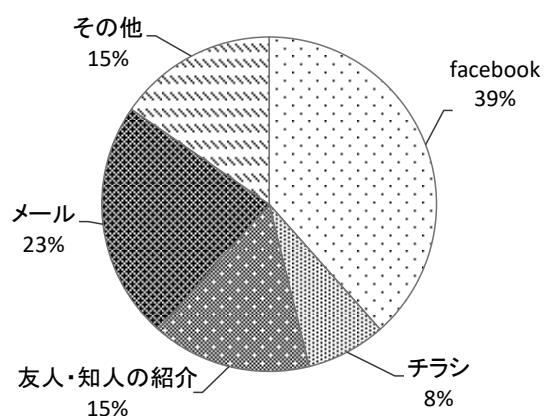
1. お住まいの市町村



2. 所属



3. 円卓会議をどのように知ったか



4. 満足度

平均：4.8（5点中）

5.満足	4.概ね満足	3.普通	2.あまり満足していない	1.不満足
10名	3名	0名	0名	0名

5. 満足度の理由

（5. 満足）

- ・ こども、教育、高齢者、自治会と、多くの情報を得ることができてよかった。
- ・ 那覇市内で活動している多様な見地のメンバーからの話は、色んな気づきがあり、参考になった。人選が良かった。特に飯塚さん、宮城さんからのはじめて知る事があり、認識をあらたにした。
- ・ コロナ禍になってから、こうしたイベントに参加することがなかったので、発表者、参加者の皆さんの生の声を聞けて、大変刺激をもらいました。
- ・ 良い構成で、大きく考えられた。
- ・ 色んな視点からのお話が聞けた。
- ・ コロナ禍で、見えない課題がいくぶん見えたようです。各分野とも、前例がないコロナ禍でチャレンジする姿勢に敬意を表します。
- ・ 多様な視点をもった方々につながった。
- ・ 人選が多様で良かった。

（4. 概ね満足）

- ・ セッションで地元の方とお話させて頂き、自治会の状況や、現状などなど伺うことができた。生の声をきくことができた。
- ・ 色々な情報とヒントを得ました。
- ・ いろんなセクションの人の生の声を聞けてよかった。

6. 円卓会議で印象に残ったこと

- ・ 協働売店、公民館の活用。自分や地元で行っている活動を振り返り、評価する機会にもなりました。八重瀬町でもこのような機会をもてればと思います。
- ・ 地域課題をどうして見つけるか、だれと共同していくか、今の仕事につながるが多く、活動に生かしていきたいと思った。
- ・ デジタルに弱い高齢者の情報格差について、課題をもっていた、こどもがキーワード
- ・ 色んな人とつながること、コミュニケーションのとり方
- ・ 横串をさす～コーディネート力をつけるには・・・課題である。
- ・ 立方体の協働
- ・ 緊急事態の下でも、チャレンジした団体はしていたし、「何もできない」とあきらめたところはあきらめてしまった、というのが「いくらでも工夫のやりようはあるんだ」と希望をもてました。”アップデート”、”組織の文化”というキーワードが印象に残りました。
- ・ 地域の支援者を集める場を、児童館発で作りたいと思います。
- ・ 基本的には色んなつながりを作る事だと思いました。
- ・ 敬老会のアウトリーチ、各分野でのヒントになりそうです。ありがとうございました。
- ・ 地域で GIGA スクール
- ・ 誰と組むか？を考えるきっかけになった。
- ・ じわっと関係
- ・ 若い自治会長がエネルギーに動くことで、周囲、市内の自治会にも影響がでるといい、今後、20 年ほどすれば自治会自体のあり方も変わってくるのかもしれない。
- ・ ”子”は地域のかすがいい
- ・ 人材活用を登録制にする
- ・ 協働（産学官）活用。普段からの繋がり
- ・ IT 化。ちびっこと高齢者の相性
- ・ シクミ。公民館。民間。知恵出し合い
- ・ 横串をさす

(写真) 会場の様子



地域部

IT 取り組み

- ・金城さん おやじの会
- ・金城さん SDGs
- ・金城さん ボランティア
- ・金城さん 学校
- ・金城さん DEAF シスター
- ・金城さん IT
- ・金城さん 90人 200人
- ・金城さん 40人 90人
- ・金城さん 100人 200人

産官学 真和志地
国結力 地域

自治会のメリット
企業の活動に
個人として
本工か

- ・情報を受けるためのネットワー
- ・仕組があるといい。
- ・ハ重組の9割で動いた。
- ・今の行き先を探せばいい。
- ・Line. スマホで変わる。
- ・使いやすいインターフェイス
- ・7月がリタイアの人と
- ・Line at. ?
- ・スマホ普及 格差を埋めたい

アウトリーチ

コロナによる自粛 → 外に出るから感染
高松市 高松市
“どりして STAY HOME” せうと
インフォーマルな主体に訪問は有効!!

子ども食堂 対象と子どもへのアプローチ

学校の先生との連携

仕組みづくり
協働アクションプラン

- ・必要となるには
- ・必要となるサービスが届いていない
- ・市民委員を通す → 高松市“何かが”不安
- ・若い人が必要。今“たば”200mの防衛
- ・200mの防衛、呼びかけ → 希望なし
- ・LINE+”防界
- ・訪問もしてない。